

新・農業経営者ルポ／第161回

大潟村に入植できなかった悔しさをバネに

大潟村に入植できなかった悔しさをバネに

大潟村といえば、国の全国公募による入植事業として初の地域だったことで知られる。資料によると、2463人の若者がその狭き門に挑み、188人が弾き返された。年齢制限の下限だった秋田県南部出身の一人の青年も落とされた口だが、入植に懸けた熱い思いは絶やさず、後に事業を興し、果ては民間育種米のF1品種で1t取りを視野に入れるなど大きく羽ばたいていった。入植事業で求めた「農業生産性と所得水準が高い農業経営ができる人」は、県内南部で確固たる地位を築いている。　文・写真／永井佳史

坊主頭に口ひげを生やし、黒いTシャツを身にまとった60代と思しきその男は一見するといかついが、目や秋田弁なまりの口調は優しさにあふれていた。事務所に通され、まず眼中に飛び込んだのは整然と立てかけられたたくさんの釣り竿だった。

「あした（8月25日）から道東のオホーツク海に行ってサケを釣るんだ。コメはだいたいもう勝負が着いたから、稲刈りまで1カ月くらい留守にする」

秋田県南部の羽後町でコメを中心に変形田では枝豆を生産する武内才一（66）は趣味が釣りだ。6月中旬から盆までの2カ月間は北海道の屈斜路湖に出かける。つまり、1年の4分の1は釣りに明け暮れていることになる。しっかり小遣い稼ぎもしており、釣った魚は市場に出荷している。

不在時は従業員の娘夫婦と農家出身の男性社員の3人に計画を伝え、時折天候の経過を確認しては必要に応じて指示を出す。いまでこそこうして趣味に興じられる時間が持てるようになったが、還暦を迎えるまでは何社も束ねる経営者としてあくせく走り回っていたのだった。

農協退職と同時に稲作農家になり、畜産4部門も一挙に立ち上げる

高校卒業後の20歳になるかならないかのころ、武内は県内の八郎潟中央干拓地（大潟村）への入植を目指していた。募集は5回に分けて行なわれたが、その最後となる第5次に応募したため、文字どおり、ラストチャンスだった。そこには8項目にわたる条件があり、その一つに「入植するときに、営農する労働力として1・8人以上を有していること。」というものがあった。両親は健在だったが、年齢の関係で2人を足しても0・8人以上にはならない。困った武内は現夫人と入籍し、同居しているような恰好で書類を作成した。しかし、最終的に合格とはならなかった。

「書類審査と筆記試験は通って、面接試験で弾かれちゃったんだよね。総合評価ってことだけど、俺のなかでは資金力が問題だったんだろうと思っている。だから、大潟村の人たちに負けないような百姓になってやるんだというのがモチベーションになったかな」

家業の稲作には両親の手伝い程度から後に主体的にかかわるも、本業は農協職員だった。転機は1994年、父の死とともに動き出す。バブル経済の崩壊を受け、ひそかに独立する機会をうかがっていた。それは、農業にとどまらず、複数の事業を同時に興すという壮大なものだった。

「農協では米穀畜産課長で辞めたんだよね。コメは自分も作っていたし、仕事で売買のことも学んだので知識はそこそこある。その前は養豚がメインで指導員をやっていた。そんな流れで稲作農家に加え、養豚場、屠畜場、食肉加工、産廃施設を手がけることにしたんだ」

事業は順調に進む。稲作を除くものは一まとめにして会社を設立したが、節税対策で一定の課税売上高に達しそうになったら部門を切り離し、有限会社を立ち上げる方法で資産を蓄えていった。

これら4部門はすべて秋田市に

㈱アクティブ・ファーム　代表取締役
武内 才一　秋田県羽後町

たけうち・さいいち　1951年、秋田県羽後町生まれ。秋田県立農業大学園畜産学科卒業。
十文字町農業協同組合（現・JA秋田ふるさと）での勤務を経て、94年に就農。

あった。農場がある羽後町とは車で1時間強の距離が離れている。往復しようとすれば3時間は要するが、武内にとってそれはさほど苦ではなかった。金銭面も問題はない。ただ、人材の確保には頭を悩ませた。

「全体で正社員80人、パート200人くらいを雇ったのが最高なんだけど、人の出入りが激しいのでその組み立てに本当に苦労したよ。豚には休みもないしね。後進が育ってきたところで出資金を出してあげて新しい会社を作らせて、完全に離れた立場になったのがいまだね。おかげで釣りにも行けるようになったよ（笑）」

一方、新たに始めた事業もある。すでに十数年が経った除雪は経営の柱に成長した。

「除雪車は10台持っているけど、1台1500万円で1シーズンに300万～500万円は稼げる。町内の選果場の駐車場を受注してから口コミでどんどん広がって、大きいスーパーも押さえたりしているので、もう営業はしていないよ。この地域では雪に抗うんじゃなくて戦っているほうがカネになるし、ウチはコメと除雪とでなんとかかんとかなっているよ」

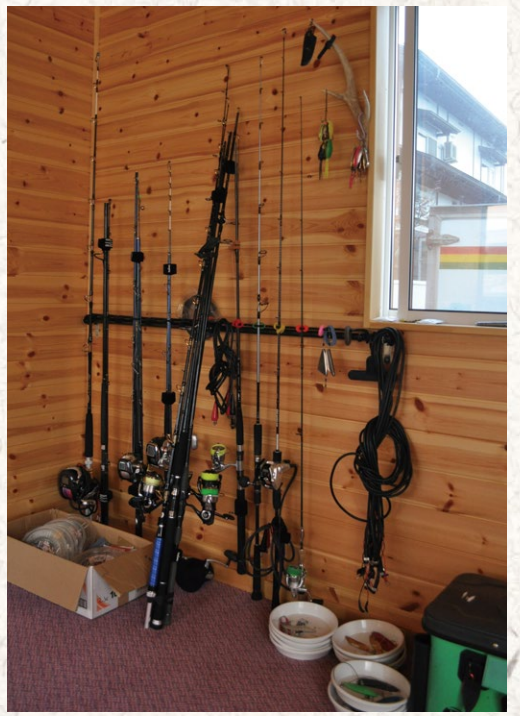
それ以外の事業には、近隣6戸と運営する農作業受託会社と青果物の選果業務とがある。

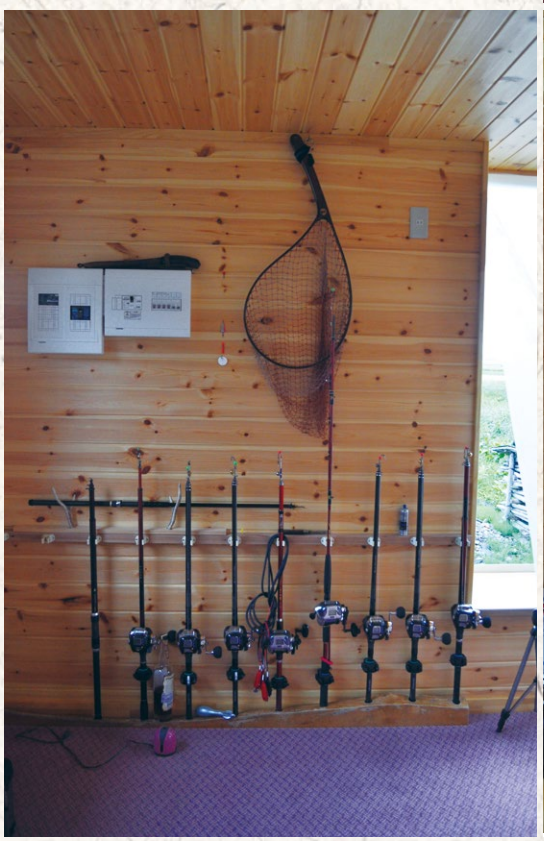
乾田直播に臨戦態勢も諸条件で10年に3回しかできず

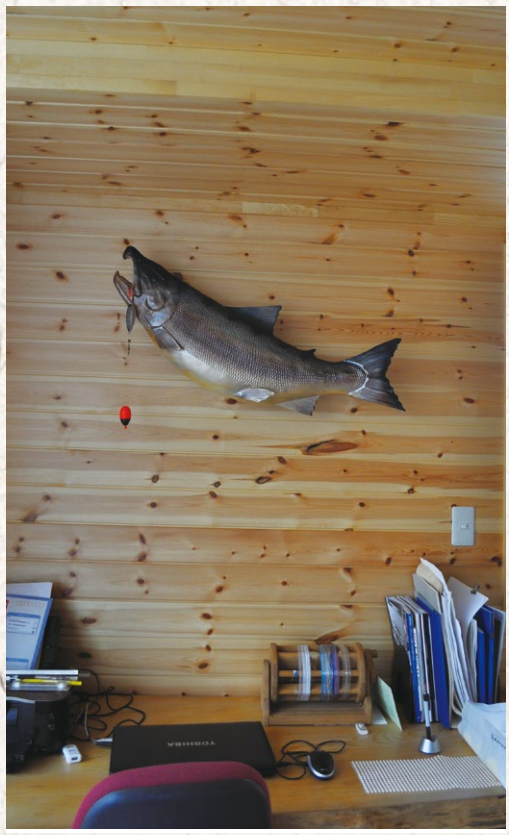
現在、水田は約15haの自作地のほか、借地として約14haを引き受けている。地域平均の1・5haからすると大規模なほうだが、所有する機械や施設からして可能なレベルの50haには開きがある。

「借りるのは経営方針に合わないので、稼いだカネは田んぼを買うのに注ぎ込んできた。でも、俺みたいな一生懸命やっている連中が困るような政策がまだ続くもんだから、思ったほど離農が進んでいないんだよね。最近は近場の人から頼まれるのが増えちゃっているよ」

30a区画のような狭小圃場では非効率なため、合筆を前提にしている。それに反対する農家はほとんどなく、農地を管理してくれれば結構という状況だそうだ。自身はレーザー







事務所の壁に立てかけた釣り竿の数々。
コメの生育期を含め、1年の4分の1は北海道などの漁場に出かけている。

大潟村に入植できなかった悔しさをバネに

レベラーを駆使し、半分以上を1ha区画に整備している。

そのレーザーレベラーは乾田直播を実施する目的で10年ほど前に購入した。東北土を考える会のセミナーで情報に接し、一種のあこがれから機械の導入に踏み切る。ところが、羽後町では上述のとおり、雪と抗わないほうがカネになる土地柄であり、対峙すれば痛い目を見ることになりかねなかった。

「ここら辺で一番乾直が普及しているのは大潟村だけど、3月っていったら一つも雪がないもんね。でも、ここは内陸部の豪雪地帯だから、4月の中ごろまであるのよ。うまく最後まで行けたのは3回だね。去年も今年も、レベラーとロータリーを経てケンブリッジローラーで入ったら、ローラーに土がべったべったに付いちゃってすぐに撤退。水を入れて代かきしたよ（笑）。乾直は能率的だし、収量も移植と同等かそれ以上だからいいんだけどね。湛水直播も多いんだけど、収量は安定しないね」

3年に一度を目安にどの重粘土圃場にもローテーションでレーザーレベラーによる均平が回るようにしているため、都合がつけばそのまま乾田直播に移行できる。無理なら炭を圃場にばらまき、透水性の改善に努めて移植の準備に入る。

移植に用いる苗は、件の農作業受託会社に播種を委託し、育苗から自前のビニールハウスで管理する。コストが余計にかかっても、乾田直播を第一優先に、移植を保険として位置づけている。





昨年合筆した重粘土圃場。畦が割れている。

貯蔵については、所属農協のカントリーエレベーターも利用してしのいでいるのが現状だ。1シーズンにおよそ120tを押し込んでいる。50haをこなす容量を満たしていないともいえるが、これは来夏までにライスセンターを増設することで対処するつもりでいる。

「カントリーを使うのも自分で建てるのもカネは要るけど、ライスセンターならウチの中で回せるでしょ。その分、効率も良くなる。面倒臭くしないためにも、今回は全額自己資金でやろうかなと思っているんだ。

補助金だといろんな規制もあるし、報告が大変だからね。農業の収入だけで労賃として身内に1000万円あればと考えているけど、それ以上は残している。自己資金で対応できるのは幸せだね」

基本線としている自力で50ha規模の経営を実現する布石はかくのごとく打たれた。他方、農業収入の質的向上ということではある多収品種に期待を寄せていた。

しきゆたかで狙うは1t取り

作付けの内訳は、あきたこまちとしきゆたかが7haずつ、萌えみのりが4・5ha、掛米のぎんさんが9ha、枝豆が1・5haになる。飼料用米には一切手を出したことがない。販路は、農協5割、食品会社4割、直売1割とリスク分散をしている。生産3年目のしきゆたかは武内にとっての有望株だ。

この品種は、豊田通商㈱が出資する水稲種子開発ベンチャーの㈱水稲生産技術研究所が権利を有し、片親に分子マーカー育種法で改良したコシヒカリを用いている。一穂粒数が非常に多いうえに千粒重も大きいことから収量性に優れ、耐倒伏性も備える。武内が作付けする早生で半糯米のハイブリッドとうごう4号は、コシヒカリ由来の良食味はもちろん、もっちりした食感が特徴だ。

豊田通商が商流を構築し、生産者への種もみの供給から契約栽培、コメの販売と一手に引き受けている。炊飯後に老化しにくい品種特性を生かし、弁当やおにぎりなどの原料として中食や外食向けに営業活動を進めているところだ。同社によると、今年度の作付面積は600ha台半ばだという。

「3年作ってみて俺のところでも適応する見通しが立ったので、将来的には全面積の半分くらいでやりたいと思っている。あきたこまちで10俵取っているけど、しきゆたかは13俵以上まで行く。もう1俵上がれば種もみ代を回収できるね。あきたこまちの価格がそれほど伸びないから、反収が上がるメリットはあるし、そこがおもしろい」

一般にしきゆたかのようなF1品種の種子は高価だといわれる。同品種も例外ではないが、武内はそれを補って余りある1t取り／10aを見据えていた。

「まだ3年だから栽培特性を熟知しているとはいえないけど、あと数年作れば茎が倒れる極限のところまで管理できるんじゃないかな。一穂粒数が180で、うち整粒を85％以上に引き上げていければ、理論上は1t取れるはずなんだよね」

その秘策として武内は疎植を検討している。あきたこまちでは37株／坪で実績を挙げており、慣行の70株／坪と比べても収量にはあまり差がないという。苗箱数が半減することで育苗代は下がり、田植え時の人手も少なくて済む。難関かもしれないが、このしきゆたかの1t取りに向けた戦いは66歳の武内の胸を熱くしている。

釣りも農業も生産性を上げるために努力するかどうか

武内は、百姓であることを心から楽しんでいた。もやがかかっている





8月24日に撮影したしきゆたかの稲穂。13俵/10aは楽勝で取れるという。

大潟村に入植できなかった悔しさをバネに

うちに圃場を一回りし、日中は市街地に出向いたりしてぶらぶらしている生活が幸せだと感じるという。それは年齢的なこともあるかもしれない。だが、ここまで歩んできた道のりを思えば、時に張り詰めた緊張感のなか、常に考えて行動してきたと推測できる。釣りにまつわるこんな話が印象的だった。

「釣りをしていて、なかなか釣れなかったらどうするのかという問題がある。釣れるまで待つ人が7割で、『なんかあの人、釣れるよな』という人が3割いる。釣る人っていうのは同じ場所にとどまっていてもえさや仕掛けを変えたり、アクションを変えてみたりといろんなことをやっている。

それからよくあるのがね、何百人もの釣り人が並んでいるんだけど、また3割の人だけが釣れる。なんでだと思う？　それはそこに何かがあるからよ（笑）。秋田の県魚にハタハタってのがあるんだけど、シーズンは12月の初めごろから1カ月なんだ。産卵のために漁場に来るんだけど、釣れるポイントの下には岩礁があって藻が生えていたりする。そこにはえさになるプランクトンや小魚が多いわけだ。そういう条件を把握している人が釣れるのよ。

やっぱり生産性を上げるための努力とか、経験を積んでいる人のほうが絶対強いのよ。釣れなくても苦労して考えるくせをつければ成果は上がる。俺のレベルは真ん中くらいだけどね」

釣りは趣味であり、真ん中というのは謙遜と受け止めると、〝本業の〟農業ではそれこそ努力してきたのだろう。

もう一つ、武内がなすべきは後継者の育成だと思うが、その件は楽観的に捉えていた。

「農業をやっていて、楽しいって感じるようになったら、カネは自然と残ってくるんだよね。やっぱり使われて嫌々やっているうちは本人も伸びないし、生産性も上がってこない。だから、俺はのんびりやっているよ。ははは（笑）」

武内は、生前の父親に農家を継ぐとは言い出せなかった。元気だった父親に遠慮した節はある。とはいえ、過去を振り返れば成人するばかりのころに大潟村への入植を志したほど人物だ。彼らに負けまいとする情熱はその後も消えることはなかった。誰に命令されたわけでもない。結局は本人次第ということになる。親の背中を見て育つという言葉があるが、武内の背中は鏡のような存在であることは確かだろう。

（文中敬称略）



乾田直播を実施するための機械群（プラウ、ディスクハロー、レーザーレベラー、ドリルシーダー、ケンブリッジローラー）。
トラクターのうち、２台はフルクローラーを所有している。